

だい ぶ か だい 第 6 部 課題

だい かい 第 19 回

まいにち にゅうりよく 毎日パソコン入力コンクール

ぜんこくたいかい 全国大会

か だい 【課題】

だい ぶ わぶん 第 6 部 和文 B

かつよう しゅうち ひがい けいげん
ハザードマップの活用 周知で被害は軽減できる
せいげんじかん ぶん
制限時間 5 分

とうじつ ちゅういじこう 【コンクール当日の注意事項】

1. 競技委員の指示があるまで、この用紙に手を触れないでください。
2. 競技委員の指示にしたがい、18桁の参加番号を半角数字で入力してください。
3. 課題の入力はすべて全角文字でおこなってください。スペースと改行も字数に数えます。ただし最終行はのぞきます。

※この課題は、2019年10月18日付、10月27日付 毎日新聞社説より引用しました。(文字数1,800字程度)

かだいぶんしょう きんそくもじ 〈課題文章の禁則文字について〉

まいにち にゅうりよく いんよう ぶんしょう げんぶん と こ
毎日パソコン入力コンクールでは、引用した文章を原文のままソフトに取り込んでいる
ため、行頭、行末に禁則文字が来る場合があります。課題文章のPDFファイルどおり
に入力すると正解になります。

しゅさい
主催

まいにちしんぶんしゃ
毎日新聞社

いっばんしゃだんほうじん
一般社団法人

にほん のうりよくけんていいんかい
日本パソコン能力検定委員会

こうえん
後援


そうむしょう
総務省


もんぶかがくしょう
文部科学省

こうせいろうどうしょう
厚生労働省


けいざいさんぎょうしょう
経済産業省ほか

ぎょう じづめ ぶんしょう にゅうりょく
1行35字詰で、つぎの文章を入力してください。


※  の箇所で行 (Enter) してください。

社説：ハザードマップの活用 周知で被害は軽減できる 

洪水の危険度を色分けして住民に伝えるハザードマップについて、国は市区

町村に作製・公表を義務付けている。 


台風19号による豪雨被害を受けた複数の地域で、自治体の作ったハザード

マップはほぼ正確に浸水の範囲を予測していたという。 

千曲川が氾濫した長野市の洪水ハザードマップもその一つだ。市内にあるJ


Rの新幹線車両基地は4メートル以上浸水し、10編成120両もの北陸新幹

線の車両が水没した。周辺は最大10メートル以上の想定浸水域だったが、そ


の予測は生かされなかった。 

阿武隈川などの氾濫が危ぶまれていた福島県の住宅街では、その通りの事態

となって多くの犠牲者が出た。行政がもっとマップへの理解を広められていれ


ば、助かった命があったかもしれない。 

全国の対象市区町村の作製率は100%近い。だが、内容が十分に住民らへ


周知されず、災害時に活用できなかったケースは少なくない。 

昨年の西日本豪雨で51人の犠牲者が出た岡山県倉敷市真備町では、想定浸

水域と実際の浸水域がほぼ一致した。だが、県のその後の調査では、マップの


内容を把握していた世帯は2割強にとどまった。 


自治体の多くは実物をホームページに掲載している。作製・更新時に全戸配

布しているところもある。 

それでも周知が進まない背景には、災害が身近で発生するまでは関心を持て


ないという住民の心理もあるだろう。また、表示が複雑で分かりにくいという

声もある。 

単に公開・配布しただけで終わりにしてはいけない。 

今回、マップに基づいて、洪水の危険が迫っている住民へ無料通信アプリ「


LINE(ライン)」で断続的に河川の水位などの情報を通知した自治体もあ

った。こうした直接的な伝達は有効だ。 


地震や火山災害と比べれば、台風による豪雨は被害の時期や場所の予測が可


能だ。気象庁は台風接近の前日の記者会見で大雨特別警報を出す可能性に言及

していた。自治体も今後、早いタイミングでマップを確認するよう住民に求め

るべきだろう。 

マップを周知することで被害は軽減できる。生かされる工夫を粘り強く続け

なければならない。 

毎日新聞 2019年10月18日 



社説：きょうから読書週間 道を照らす本との出会い

読書週間がきょうから始まった。11月9日までの2週間だ。

人は読書体験を通じて、さまざまな言葉や生き方に触れ、世界を広げることができる。本との出会いを、あらためて考える機会にしたい。

読書離れと言われて久しい。毎日新聞が16歳以上を対象に実施した読書世論調査では、普段から書籍を読む人の割合は前年に比べてほぼ横ばいだったものの、読まない人の割合が3年連続で上回った。

子どものころに大人に絵本を「よく読んでもらった」人のうち、今も書籍を読む人は54%で、全体平均より9ポイントも高かった。

ソーシャル・ネットワーキング・サービス（SNS）などインターネットが及ぼす影響も小さくない。

毎日新聞が全国学校図書館協議会と合同で小中高生を対象に実施した学校読書調査では、読書よりスマートフォンなどに触れる時間のほうが長い傾向が浮き上がった。小学生でも平日のスマホなどの利用は「30分以上3時間未満」が57%にも上る。

親も教師も多忙である。だが、子どもが本に触れるきっかけを作るのは、大人の役目でもあるはずだ。

本との出会い方の一つとして、年100冊以上を読む15歳の女優、芦田愛菜さんが読書遍歴をつづった単行本「まなの本棚」が話題だ。同世代の10代への読書案内としてだけでなく、孫を本好きにしたい祖父母世代が手にとっているという。

芦田さんも著書の中で紹介する「魔法の宅急便」の著者で、国際アンデルセン賞受賞作家の角野栄子さんも、本の力を説く。

角野さんは、第二次大戦中の少女時代を振り返り、「過酷な時期を本によって、どれほど慰められ、生きる勇気を与えられたかしれない」と語っている。

本との出会いに遅すぎることはない。親が子どもと一緒に家で読書の時間を設ける「家読」もいい。

読書週間の標語は「おかえり、菜の場所で待ってるよ」だ。大量かつ高速の情報に流されがちな現代社会で、本はしおりをはさみながら自分のペースで読み進められる。

しおりは、山道で枝を折って道しるべにする「枝折る」が由来という。本もまた、人生に迷った時の道しるべになってくれる。

毎日新聞 2019年10月27日